

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷四十二第

行發日一月二年二和昭

論 叢

印紙稅廢止論 教授 法學博士 神戸 正雄

生物の美的進化 教授 理學士 川村多實二

露西亞の新經濟政策と農業 教授 法學博士 河田 嗣郎

說 苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論 教授 法學博士 田島 錦治

英國勞働黨の銀行國有論 助教 經濟學士 谷口 吉彦

物價指數の意味 講師 經濟學士 蜷川 虎三

雜 錄

町人の財力と士農兩階級 教授 經濟學博士 本庄榮治郎

Populationistik につきて 教授 法學博士 財部 靜治

英吉利の國際海運收入 教授 經濟學博士 小島昌太郎

獨逸帝國銀行の發券制度 助教 法學士 沙見 三郎

法 令

健康保險特別會計規則・健康保險法施行規則

物價指數の意味

蜷 川 虎 三

物價指數は何を測り、何を示すものであるか。

物價指數に關する理論的研究は、内外共に甚だ多く、極めて精細なる部分的研究に迄及んでゐる。併し物價指數と呼ばれる數値が、一體何を意味してゐるか、又これに、如何なる意味を有たしめ得るかと云ふ點に就いては、それ程明確には答へられてはおらない。而もこれが、物價指數研究の基礎であり、解決の鍵であると、筆者は信する者である。而してこの問題を分析解剖して見ると、一見甚だ單純なるが如くして、實は極めて多岐なる内容と、考察さるべき多くの問題を含んでゐる。

従つて、斯くの如き問題に對し、明快なる解答を與へることは、未熟なる筆者の、素より爲し得べき所とは考へないが、問題に對する視角を定める意味に於いて、本稿に於いては其の大綱を捉へることに努め、個々の部分に亘る細說詳論は、之れを續稿に譲らうと思ふ。

從來説明されて居る所に依れば、物價指數は、貨幣の價値の變動を測り、且つ之れを示すもの

と考へられてゐる。茲に謂ふ貨幣の價值とは、貨幣の交換價值即ち商品又は勤勞に對する貨幣の購買力の意に解せられる。又、物價指數は、物價平準或は一般物價を測るもの、或は示すものと云はれ、而して、物價平準或は一般物價と貨幣價值とは、逆數的關係に在るものとせられる。この點に就いては、必ずしも多く、諸家の見解を引用する必要はないであらう。

所が、これでは説明にはならない。従つて又、物價指數の本質が何んであるかを理解すること出來ない。貨幣價值、一般物價、物價平準なる觀念が、全く不明確なものだからである。物價指數は云ふまでもなく、一の數量的表現であるから、これに依つて表現せらるべきは、當然、數量でなければならぬ。従つて、物價指數の意味する所が、何んであるか、明確に規定される爲めには、貨幣價值、一般物價或は物價平準が、如何なる數量であるか、規定せられなければならぬ。而して、斯くしてのみ、初めて物價指數の意味は理解し得るのである。

このことは、多くの場合に満足せられておらない。従つて、物價指數の意味或は目的が何處に在るかが明にせられない。明にせられないで物價指數を作らうと云ふ、病を知らずして藥劑の處方を與へるにも等しき亂暴ではあるまいか、而して危険ではあるまいか。經濟學の領域に於いては、斯かる事例は乏しくない。量的なる觀念は、如何にして測る可きか、與へられて、初めて確定する。その原因が何んであるとか、影響がどうか、或は、言葉の上で、ぐる／＼引き廻して、捏ね上げてしまふ様な定め方では、到底、理解は出來ない。

従つて、方向を變へて、物價指數を規定し、これで測つたものが、貨幣價值であり、物價平準

* Meerwarth, Nationalökonomie und Statistik, S. 411.

であること定めることも出来よう。それは自由である。何を何んと定義しようか、要は現實の事象を本質的に理解する以外に何ものもないからである。併し、實際に於いては、既に、貨幣價值或は物價平準の觀念が與へられて居り、物價指數は、これを測る道具或は方法と認められておるのが普通である。^{*}而も、General price movement, Level of prices, allgemeine Preisstand, allgemeine Preisniveau 等の觀念は、何等、明確には與へられては居らないのである。故に、物價指數を作るべき處方は與へられておらない。又、物價指數なるものを、假に作つても、これが果して、其の資格ありや否やを検するの道さへない。

多くの説明は、價格の變化の程度並に其の向きの區々であることを説き、其の趨勢を観るものが一般物價であり、大波、小波、波浪の動きの中にも、一の水平線を考へ得るが如くに、物價平準を認め得ると云ふも、考へ得ること、それを測ることは全く別個の問題であり、求むることは、如何なる量を以て物價平準とするかを決定するに在る。若し、從來の論者の如き態度を以て、經濟事象を量的に取扱はんとするならば、そのこと自體が矛盾である。筆者は此の意味に於いて、獨逸に於いて、經濟統計を論ずる Zizek,¹⁾ Meerwarth,²⁾ Tyszka³⁾ 等の學者の立場に多くの疑を有ち、殊に、其の物價指數に對する態度の如きは、到底これに服するを得ない。全く曖昧そのものだからである。

従つて、物價指數の研究は、他の經濟學上の諸問題と共に、先づ曖昧なる觀念を排除し、これを克服することに依つてのみ、初めて可能となる。

^{*} 例へば山崎博士經濟原論(第六版) p. 160 を見よ。

- 1) Zizek, Grundriss der Statistik, II Teil, § 80, III.
- 2) Meerwarth, Nationalökonomie und Statistik, Kapital V.
- 3) Tyszka, Statistik, Teil II, Kapital IV, A. § 32.

物價指數を如何に觀念し、如何に定義するも自由である。併し、茲に問題とする所は、從來用ひられ、且つ論せられて居る物價指數なるものが、何を測り、何を示すかの問題である。故に、其の所謂物價指數を吟味して見ねばならぬ。

現實に、物價指數と呼ばれてゐるものは、多數の商品の、異なる二時期に於ける價格の比率の平均値を其の項とする時間的數列である。

或る一定の時に於ける、一の商品の一定量の價格を P_0 とし、他の時に於ける、同一の商品の同一量の價格を P_1 とすれば、此等二時期の價格の比率は、 $\frac{P_1}{P_0}$ である。斯かる比率を、多數の商品に就いて求め、此等の比率を平均し、其の平均値を時の函數として見たものが物價指數である。一般に、指數は、統計上、統計的集團即ち實數の總和に於ける、時間的又は場所的の、相對的の變化を測り且つ示す所の數の系列と解せられてゐるが、物價指數の場合は、此の集團が諸種の價格より成るものである。

形式的に見れば、右の如く解し得るが、其の内容とする所の商品の種類に依り、價格の相場の見方に依り、比率の分母たる價格を求めるとき——基準——に依り、又、多數の比率を平均する其の方法に従つて、其の實質的意義は異なるを得ない。故に、物價指數を右の如く形式的に定義しても、たゞ、それだけでは、何んの意味を有たしむることも出来ない。それに、一定の内容を與へるためには、實質的に規定せねばならないのである。然るに、從來の多くの學者の觀念せ

* cf. Fisher, Making of Index Numbers, p. 3.

** Young, "Index Numbers" in Hand book of Mathematical Statistics, p. 181.

しが如き、貨幣價值、物價平準等を以てしては、物價指數に於ける右の内容を定める何等の根據をも與へることは出來ない。現に、物價指數に對し、異論の多きこと、それ自體がこれを裏書するものに他ならないのである。Morgenroth の物價指數に關する説明、批評の如きは、この事實を語る適例として擧げることが出来る。筆者の満足し得ぬ所である。

例へば、こゝに平均の方法を考へて見る。平均すると云ふことが、數列を表現するための一個の値を求めるところを意味するならば、それは、その數列を構成する値を基礎とする限り、如何なる數値をも定め得る。數列中の最大値を示す項を探るも最小値の項を用ふるも自由であると共に、此の兩者の和の二分の一、或は數列の諸項を大きさの順序に排列して、其の最小値を示す項乃至は最大値を示す項より、一定の順位に在る數値を探るも任意である。更に、普通に平均と謂はれる所の、算術平均、幾何平均、調和平均等を用ふることも亦、勿論差支へない。たゞ併し、常に一定の方法を探る意味と根據が無ければならぬ。従つて、一般に平均と謂はるゝ型を盲信し、如何なる場合にも、平均とは、此の型の計算を行ふものとするが如きは、理論上無意味なることのみならず、其の得たる結果が實際に何を語るかを知ることが出來ない。茲に數理統計ではない經濟統計の問題が横はる。

右の如き意味に於て、諸價格の比率の平均が物價指數であり、それが假に物價平準を表はすものとすれば、所謂物價平準は幾様にも存し得る筈である。又幾様にも存せねばならぬ。併し又、一派の論者は、價格の變動の原因を問題とする。價格の變動の原因を、貨幣側に存するものと、

* Morgenroth, "Index ziffern" Handwörterbuch der Staatswissenschaften. V Bd.

** Zizek, Die Statistischen Mittelwerte, S. 159.

商品側に存するものとに分ち、前者を一般的、後者を個別的或は偶然的なりとする。而して、平均すると謂ふことは、個別的、偶然的なる原因の影響を排除し、一般的原因に基づく結果を抽出すものと解し、價格の比率の平均を求めることは、即ち、一般的原因の結果、換言すれば、貨幣側に存する原因に基づく結果を見ることであるとす。

平均を此の意味に解すれば、平均値を求めることは、先づ、その數列が如何なる誤差法則に従ふものであるかを確かめねばならぬ。^{*}斯くして求め得た値は、先づ個別的原因を排除し、一般的原因に基づく結果を示すものと考へられるとしても、一般的原因に基づく結果が、貨幣側に存する原因、或は貨幣に働きかける原因によるものとするが爲めには、それだけの理由が無ければならぬ。貨幣の如何なる性質が、かゝる原因の働きを受けて變化し、而も其變化が量的に表現し得るのであるか。換言すれば、其の變化の量的表現の可能なる貨幣の性質とは一體何んであるか。この問題の解決せらるゝ時、誤差理論の援用は、我等の平均の問題を解決し、従つて又、物價指數の實質的觀念、即ち、その意味を規定する。經濟統計の問題としての物價指數の研究に於いては、誤差理論の援用に先つて、商品價格の分析を必要とする。茲に、數理統計ではない經濟統計の問題が横はる——と云ふ前言を再び繰り返へして置きたい。

以上述べたるが如く、物價指數を形式的に定めても、其の内容が異なれば、其の意味は異なる。又異ならざるを得ない。單に物價指數を形式的に定義して置いて、其の目的には一つしかない、否、二つ或は二つ以上あると論ずるが如きは、必竟、水掛論に過ぎない。故に之を實質的に定義

* Forcher, Die statistische Methode als selbständige Wissenschaft, S. 296-297.

し、その含む意味を規定するものからすれば、それ以外の意味はなく、従つて又、その意味の範圍を越へて、目的を云爲し得ぬことは云ふ迄もないことである。斯くの如き、極めて明らかなことが多く問題とせられたと云ふことは、物價指數の研究が技術的或は形式的に囚はれる所多く、經濟的意味に於て理解し或は研究せんとする傾向の弱かつたが爲めではあるまいか。

此の疑問に對して解答を與へんが爲めには、是非とも文献的に研究し、多くの學者が物價指數を如何に觀念し、それに如何なる意味を有たしめたかを知らねばならぬ。殊に、米の Fisher、英の Walsh は、物價指數の目的は唯一個のみよりなしと論ずるに對し、米の Mitchell 英の Edge-worth 等は之に對する復數論者として著名であり、之等に就いて詳論することは順序ではあるが、此の短文のよくし得る所ではないから、他の部分と共に、之を續稿に譲り、茲には、物價指數の一方の雄たる Fisher が、物價指數に如何なる意味を有たしめたかを見るにとゞめようと思ふ。我國に於ても Fisher は極めて廣く知られてゐる。廣く知られてゐる學者なるが故に、而も、今問題とするが如き點に就いては、餘り注意されておらぬが故に、其の立場を知らうと思ふのである。

三

Fisher の物價指數に關する研究は、其の有名なる Making of Index Numbers, 1923. に就いて窺ひ得べく又之れによるを普通とする。併し、此の書に於ては、物價指數は單に形式的に定義されたるといふより、それが經濟上如何なる意味を有するものなるかに就いては、何等の説明も與

* 此等の諸學者の立場に就いては森田優三氏の論文（國民經濟雜誌第四十卷第十六號）に紹介されてゐる。殊に Mitchell に詳しい。Fisher は猪間驥一氏（經濟學論集第二卷第三號）、Walsh は宗藤圭三氏（同志社論叢第十二號）に依り、何れも紹介されてゐる。

へられておらない。彼の研究は、専ら、その形式的要求の満足の範圍に限られてゐる。これは恐らく其の前の著書である The Purchasing Power of Money 1911. (new and revised ed. 1922) に詳論されてゐるからであらう。

今、右の「貨幣の購買力」に就いて見るに、Fisherの物價指數作製の目的は、彼の貨幣數量説の根據である、交換方程式に出發する。即ち、よく知られてゐる $MV + M'V' = \sum P_0 Q_1$ が其の出發點である。一定の時に於ける貨幣數量は、商品の價格と其の數量の積の總和即ち價額の總和である。彼は、右の方程式の右邊を、 $\sum P_0 Q_1 = PT$ とする。* 而して、Tを取引高、Pを物價指數を表はすものとし、而もPは、 $\frac{P_1}{P_0}$ の平均であるとする。

右の式より、 $\frac{\sum P_1 Q_1}{T} = P$ であるから、Pを $\frac{P_1}{P_0}$ の平均とすれば、Tを如何に定めるかに依り、 $\frac{P_1}{P_0}$ の平均方法は決定する譯である。若し、

$$T = n \cdot \frac{\sum \frac{P_1}{P_0} P_0 Q_1}{\sum \frac{P_1}{P_0}}$$

とすれば、Pは $\frac{P_1}{P_0}$ の算術平均である。或は又、 $T = \sum P_0 Q_1$ とすれば、 $P = \frac{\sum P_1 Q_1}{\sum P_0 Q_1}$ となる。結局、Tを如何に定むるかの問題に歸する。而してこれは、Tを取引高を示す價額であることには變りはないが、之を如何に定むるかは、之に如何なる經濟上の意味を含ましむるかに依り決定されることである。

既に、或時の取引の價額は $\sum P_0 Q_1$ と定められ、Pは $\frac{P_1}{P_0}$ を内容とすべきことは條件づけられ

* Fisher, The Purchasing Power of Money, new and revised ed., Ch. X and Appendix to Ch. X.

ておるのであるから、Tは、此の範圍内に於て、或る意味を有たねばならぬ。その歸結として、 $T = M_{P_0} O_1$ が考へられ、Fisherは之を採つたのである。即ちTをば、基準時の價格に於いて比較される可き時の取引數量を取引する場合に於ける總取引價額であるとする。Tを斯く解すれば、Pは、同一數量(比較されるべき時の數量)を取引するに要する二時期に於ける貨幣量の比率を示すこととなる。物價指數Pは、Tの經濟上の意味に依存し、 $P_1 P_0$ なる形式に條件づけられて、其の意味を有つてゐる。Fisherに於ては、 $MV + M'V' = M P O = P T$ を離れて、物價指數を考へ得ない。而して、殘る問題は、物價指數が一の時間的數列として、數列の各項の相互比較可能の性質を有せしむることである。諸々のテストの問題は、茲に出發點を有つ。Making of Index Numbersは、其の教科書の意味を離れては、この點のみを内容の骨子とすると云つて決して決して過言ではあるまいと思ふ。

Fisherの物價指數の意味は、一般的には、右の如くして定まるものではあるが、更に、指數構成の内容たる商品の種類及其の價格の性質に依り限定される。この範圍に於て、その物價指數の個別の意味、従つてその實用を異にするは、Fisherも亦認むる所である*。併し、Fisherの理想的公式 $\frac{P_1 P_0}{P_{0q_1} \times P_{1q_0}}$ 或は其代用として推賞される $\frac{M P W}{M P W}$ の如き公式が、彼の物價指數に與へた實質的なる經濟上の意味を有つPであるかどうかは疑問である。或る形式的なる要求を満足するために、實質的意味を或る程度に歪めることは許るされるとしても、その限界は何處に存するか、テストより何より、Fisherに於ては、これが問題でなければならぬ。勿論、交換方程式を離

* Fisher, Purchasing Power of Money, pp. 204-205.

れて観念するのであれば、それは別箇の問題である。

例へば、右の $\frac{I_{1913}}{I_{1914}}$ である。これによれば、二時期の價格總和の比率を求めることになり、殊に生計費等を考へる場合、同じ生活資料を得るに要する貨幣量の變化を知ることが出来る。卸賣商品、小賣商品、粗製原料、紡績工業用原料、など何を選んでもこれを求めることが出来る。

この意味に於て、右の理想的公式は或種の特徴を有する。その特徴に最大の價值を認める者からすれば、それは、たしかに "Ideal" である。併し、筆者は、茲に Fisher の物價指數に與へた意味を一貫して理解することの出来ぬ矛盾がありはせぬかと思ふ。

勿論、Fisher の交換方程式から離れて、或る經濟活動に必要な貨幣量の變化と考へる限りに於いては、物價指數は、 $\frac{I_{1913}}{I_{1914}}$ であり、經濟活動の性質により、其取扱ふ商品の種類及其價格の性質が定まり、その、必要とする貨幣量を測るがために、必要とする意味に應じて W の性質が定まる。此の意味に於ては、物價指數は、何れも異なる個別的の意味と内容を有する。而して、かゝる物價指數は、我等の經濟學の實際的研究の材料として、又財界人に實用ある所と考へる。中川學士が、「 $\frac{I_{1913}}{I_{1914}}$ なる指數に大なる魅力を感じる」と云はれる其の立場に對しては、筆者は、右の意味より、賛同し、更に強く之を主張せんとする者である。

右の式の意味を、貨幣の購買力の變化なる言葉で表現することは自由である。この意味に於ては、貨幣の購買力の變化は、極めて制限的のものであり、個別的のものであることは云ふ迄もない。一般的なる、最も普遍的なる意味に於て貨幣の購買力の變化なるものを思惟し、右の式に對

* 中川友長氏「物價指數の研究」經濟研究第二卷第二號、p. 218.

し、之を求むるが如きは、求むること自體が無理であるばかりでなく、誤である。

然るに、實際に於て、貨幣の價值或は貨幣の購買力と謂ひ、一般物價或は物價平準と謂ふは、右の如き個別的のものではなく、最も普遍的にして、唯一無二のあるものを豫想してゐることは、疑ひのない事實である。言葉は兎に角、斯かるものが果して存在するであらうか。物價指數に、かゝる意味を有たしむることが可能なるためには、そのもの、本體を捉へねばならぬ。茲に價格の分析を必要とする問題が起らざるを得ない。而してそれを回避しては、問題は飽くまで迷路にとゞまらざるを得ないのである。幾分冗長の嫌はあるが、以下、少しく之を述べて見よう。

四

現在、我等の日常生活資料は、殆んど全部が商品である。即ち、それは他人の使用に當てんが爲めに生産せられたるもの、賣らんが爲めに生産せられたる財貨である。物は有用物たる限りに於て財貨と云はれるが、財貨は交換物たる限りに於て商品となる。

それら商品は、常に一定の物理的數量と、價格とを有つてゐる。米一升五十錢、砂糖一斤三十錢と云ふが如し。物理的數量を有つてゐることは、物質たるの特性であり、價格を有つ——一定の貨幣量で表現される——と云ふことは、それが當然、貨幣と交換されること、されねばならぬことを意味する。

然らば、何故に、一定量の貨幣を以つて表現せられねばならぬか、即ち、何故、貨幣と交換さ

れねばならぬか、それは斯くして初めて、商品たることの確認せられたる實證を得るからである。交換物たらんとして、市場に提供せられたとしても、果してその希望通り商品たり得るかどうかは、誰れも保證せぬのが、現時の經濟組織の特質である。

今、商品Aの x 量が貨幣 z 量と交換されたこと云ふことは、その商品が商品界全體に於けるその位置を示すものに他ならぬが、換言すれば、商品の單位量は z/x だけの貨幣量即ち價格を有することが示された譯である。然らば、 x 量は何故に、貨幣 z 量と交換されたか。少くも商品の一定量と貨幣の一定量とが、定められるためには、その間に何等かの共通量 V を豫想する。即ち、今、商品Aを含む V の量と、貨幣が含む V の量とが比較されたればこそ、茲に、貨幣は z 量、商品は x 量と、各その數量を以て表現するを得たのである。でなければ、 x 量、 z 量と定められる譯がない。こゝに、商品の物理的數量一單位に含まれる V の量を V_1 、貨幣一單位に含まれる V を V_m とすれば右の關係は、

$$x V_1 = z V_m$$

なることを意味する。

現在、商品は、商品たる限り、何れも貨幣と交換される。貨幣と交換されねばならぬ。従つて、何れの商品にも共通量 V の存在は疑ふことが出来ない。事實である。商品の價格が z/x 、 z/y と云はれるのは、 V_1/V_m 、 V_2/V_m を、物理的數量の關係として表現したに過ぎないものである。

いま、商品Aの價格を簡單に p_1 に表はせば、 p_1 は V_1/V_m と見ることが出来る。又、商品Bの價

格を p_1 にて表はせば、これは、 $\frac{V_2}{V_m}$ と見ることが出来る。而して、異なる時に 同一商品の同一量は p_1, p_2 なりとせば、 $\frac{V_3}{V_m} \cdot \frac{V_2}{V_m}$ なるものと見ることが出来るであらう。商品が n 個あれば、

$$\begin{aligned}
 p_1 &= \frac{V_1}{V_m} & p'_1 &= \frac{V'_1}{V'_m} \\
 p_2 &= \frac{V_2}{V_m} & p'_2 &= \frac{V'_2}{V'_m} \\
 & \dots & & \\
 p_n &= \frac{V_n}{V_m} & p'_n &= \frac{V'_n}{V'_m}
 \end{aligned}$$

である。物價指數は、その形式的定義よりすれば、價格の比率の平均である。故に價格の比率がその構成要素である。

$$\begin{aligned}
 \frac{p'_1}{p_1} &= \frac{\frac{V'_1}{V'_m}}{\frac{V_1}{V_m}} = \frac{V'_1}{V_1} \cdot \frac{V_m}{V'_m} \\
 \frac{p'_2}{p_2} &= \frac{\frac{V'_2}{V'_m}}{\frac{V_2}{V_m}} = \frac{V'_2}{V_2} \cdot \frac{V_m}{V'_m} \\
 & \dots \\
 \frac{p'_n}{p_n} &= \frac{\frac{V'_n}{V'_m}}{\frac{V_n}{V_m}} = \frac{V'_n}{V_n} \cdot \frac{V_m}{V'_m}
 \end{aligned}$$

説苑 物價指數の意味

故に價格の比率を平均すると云ふことは、その意味は、實は、 $(\frac{V_m}{V_1} \cdot \frac{V_1}{V_2})$ 、 $(\frac{V_m}{V_2} \cdot \frac{V_2}{V_3})$ 、…… $(\frac{V_m}{V_{n-1}} \cdot \frac{V_{n-1}}{V_n})$ を平均することに他ならぬ。故に、何等かの方法を施して求むるとすれば、 $\frac{V_m}{V}$ の比を知るか、 V_1/V_2 の如き商品に於けるVの變化を知るか、何れかの問題に歸する。併し、實際に必要とすれば $\frac{V_m}{V}$ である。この量は、何れの價格の變化にも共通であり、個々の商品の價格の變化に於て、 V_1/V_2 、 V_2/V_3 ……の如きを求むるには、先づ、 $\frac{V_m}{V}$ の與へられることを必要とするからである。従つて、問題は $\frac{V_m}{V}$ を求むる方法如何に在る。

$\frac{V_m}{V}$ を求める方法は、他の V_1/V_2 の如きを除却する方法である。故に、價格の比率の平均法の何れかが、此の目的に適ひ得れば、その平均方法が求める方法である。茲に於いて、その方法は限定せられ、どんな平均方法を探つてもよいと云ふことは出來ない。目的に依り、方法は規定される。例へば幾何平均が用ひられるとすれば、

$$\frac{p_1}{p_1} \times \frac{p_2}{p_2} \times \dots \times \frac{p_n}{p_n} = \left(\frac{V_m}{V_1 V_2 \dots V_n}\right) \cdot \left(\frac{V_1}{V_1} \times \frac{V_2}{V_2} \times \dots \times \frac{V_n}{V_n}\right)$$

であるから、若し幾何平均が此の目的に適ふものであれば、

$$\frac{V_1}{V_1} \times \frac{V_2}{V_2} \times \dots \times \frac{V_n}{V_n} = 1$$

なることを必要とする。

平均すると云ふ以上、數列を構成する各項が平均さるべき條件を具備すべきことは、今更改めて云ふ迄もないが、右の平均方法は、實際に就いて、適當なるものを選ぶより他はない。これ

は、前にも述べた様に、その従ふ誤差法則を定めること、即ち、誤差函數を定めることに歸する。誤差函數は偶函數であつてY軸に對稱的である。故に、實際問題としては、價格比率の度數分布を見る必要がある。Edgeworth等が、物價指數に就いて誤差理論を援用することは、右の意味に於て、理解し得ると思ふ。勿論、その物價指數論には幾多の問題があるが、今、茲にそれに觸れる餘裕がない。

以上、述ぶる所に依つて、價格の比率の平均は、個別的原因の作用を除却し、一般原因に依る結果を明らかにすることであり、それが所謂、貨幣側に存するものであると云ふ普通の説明が、何を意味してゐるかが理解し得る。平均すると云ふことに、個別原因に基く結果の除却と云ふ意味があるにしても、たゞ漠然と、其の意味を掲げただけでは、經濟事象の本質を捉へることは出来ない。筆者は之れを明らかにするために、價格を分析して數量Vの存在を認識し得たのである。經濟學上所謂價值とは、要するに、このVに與へた名に他ならない。その意味に於ては、Vは貨幣の價值であり、 V_1, V_2, \dots, V_n は商品の價值である。物價指數は、貨幣價值の變動を測定すると云ふことは、かゝる意味に於て可能である。併し、今茲には、交換なる事實より數量Vの存在を認めたと過ぎない。經濟價值論はこのVの本質の理解を目的とする。Vは一の量である。この量の本質は、この量が如何にして測らるゝかに依り、明らかにせられる。而して、その測定の方法は、全く、社會に依て規定される。即ち、それによらねばならぬ方法を社會が與へる。此等の問題は、茲に取扱ふには餘りに大である。こゝでは、明らかにVなる量の存在を認めて、物價指

* cf. Mills, Statistical Methods, p. 178.
** 實例としては、龜田豊治郎氏(統計時報第七號)、森田優三氏(國民經濟雜誌第四十卷第六號、第四一巻第一號二號)の目銀指數の研究 Mitchellの研究(Index Numbers of Wholesale Prices in the United States and Foreign Countries, Bulletin of the United States Bureau of Labor Statistics, No.

數を求めるときの平均の従ふべき意味を與へると共に、從來の經濟學の理論に於て、又物價指數の研究に於て、價値なる言葉に囚はれて、事實そのものが非常に歪められて意識され、宙に浮べる觀念たるが如き觀を呈してをつたことを注意して置きたいと思ふ。

五

冗長なる敘述をなし來つたが、問題は極めて簡單であり明瞭である。

物價指數を價格の比率の平均値を其項とする時間的數列と定義しても、それは飽くまで形式的の觀念で、物價指數の實質的内容、意味を語るものではない。

例へば、平均と云ふも、意味なくして、計算の方法が與へられるものでは決してない。従つて、價格の比率を平均するに當つては、先づ如何なる意味を與へるか、先決問題である。

從來説かれた所に依れば、貨幣の價値、貨幣の購買力、一般物價、物價平準なる觀念を以つて右の意味の内容とした。併し、その觀念自體が甚だ曖昧であり、量的方法を規定することの可能なる程に數量的に正確性を有つものとしては與へられなかつた。従つて物價指數そのものが、何を意味するかは、明確には理解せられなかつたのである。その理解なくして、方法の末梢を論ずる者が多く、この末梢より觀れば、物價指數の經濟上の意味は甚だ疑はしく、理論上、之を否定し去らうとする學者もないではない。併し、それは問題を深く見ぬ者であり、又、物價指數に、その意味以上の意味を強要するの徒である。

Fisherの如きは物價指數の研究に於て一派の重鎮であり、その與へた經濟上の意味はかなり正確なものであるが、Fisherの方法のもてはやされる割合に、其の立場に就いては學者の顧みる所

284) 等を擧げることが出来る。

* 此の點に就いては更に改めて論ずる。

少なく、又 *Index* 自身に於ても必ずしも、一貫しておらぬ憾みがある。經濟學的研究に於て、出發點の曖昧漠湖たるもの、多きは一の特質である。

物價指數に如何なる意味を有たしむることも自由であるが、たゞ正確に與へられねばならぬ。筆者は、物價指數の意味として、 $\frac{P_{1914}}{P_{1913}}$ を重要視する。言葉に翻譯すれば、經濟活動に必要な貨幣量の變化である。勿論、之れを貨幣の購買力と名づけることは妨げない、但、その限定的なる意味を有つことは記憶せねばならない。Fisher の "Ideal Index Number" の如きも此の意味に於て一つの型である。理想的であるか、どうかは其の立場によつて定まることである。

右の如き、制限的、個別的ではなしに、より一般的なる性質を、意味を、物價指數に與へることが出来るであらうか。そのために商品の價格の分析を試み、數量 V の存在を確認し、價格の比率の平均を求めると云ふことは、 $\left(\frac{V_{1914} \cdot V_{1913}}{V_{1914} \cdot V_{1913}}\right)$ なる價格比率の構成内容より、 $\frac{V_{1914}}{V_{1913}}$ なる値を抽出することに在ることを明らかにし、それがためには、所謂誤差理論の援用を可能且つ必要としたのである。

形式的に定義されたる物價指數に如何なる意味を與へることも任意であるが、その意味は明漸且つ明確なものでなければ、この物價指數が經濟學上、又經濟の實際に於て意義あり、價值あることは、全く不可能のことに屬すると云ふのが、本文を一貫して存する筆者の考である。既に本文の中に於ても諸所に、物價指數の問題を提示したが、此等の種々なる問題に就いては、更に稿を改めて、研究して見たいと思ふ。(一九二六・二二五)